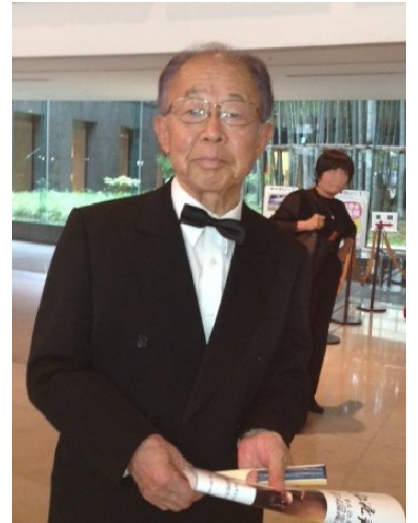


私はこの度神奈川会「ギャラリー」欄掲載用として「八十路からの眺望」と題したつたない一筆をいたためましたが、ここにその「プロローグ」を下記します。

私達の周りには 80 歳を超えた人はあまり見かけない。いつもの集いの中で誰かのことを「あの人は確か 80 歳を超えている筈」などの会話を聞くと私は「随分高齢だなぁ」と感じる。そしてすぐ、待てよ、オノレも 82 歳と気づき客観的にはオノレもそう思われているのかと寂しくなる。79 歳と 80 歳は受ける感じが相当違うようで 80 歳の声を聞くとその言動、振る舞いの如何を問わずそれなりの気遣いが感じられる。と同時にグループの中などでは難しい役割などは殆ど頼まれず敬遠気味に扱われるケースが多いようで、こんな時大いなる社会的阻害感を味う。ふと老を感じさせる言動などあれば完全に老人の刻印を押され対等に扱ってもらえなくなるようで怖い。このしっぺ返りで平素わざとぼん

“ 2020 年、オリンピック万歳！”

やり振る舞い、これに老人ボケ扱いのような対応が見られた時ピリッと切り込んでやると面白いだろうなぁ、と思う。私の場合有難いことに年齢より少し若く見られる場合が多いようなので、対等なお付き合いを願うため敢えて歳は言わないようにしている。



越中 幸夫

八十路からの眺望

私はいつの間にか八十路を2つ程超えてしまった。そして特に最近のことだがここまでくると若い頃の様々な出来事の数々が頻繁に浮かんで来て、その中で動き回った自分の姿にふれ色々な思いにふけることが多い。これは先の短い年寄り特有の現象と見るが、年輪を重ねたことで視座が広く深くなったせいか振り返って見た過去の自分に対する自己評価は極めて低い。例えばあの事件はもっと完璧に収拾できた筈だ、何故あの点から検討しなかったのか、突込みが全く足りなかった。など特に現役時代の仕事に関する反省が多い。そして自分の所業だけでなくその時関係したスタッフへの個人評価にまで及び、例えばその時尊敬していた上司が決断できない無能な上司だったような気が

してきたり、できが悪いと切り捨てた部下が人間としてしっかりしていた考えを持っていたことに気づき見直したりもしている。



更に退職後の近過去については 10 数年の有り余る時間と自由がある中計画的な事前目標も検討せず、好きなことややり残したことなどに漠然とあても無く取り組んで貴重な月日を費やした口惜しさを感じたりしている。今更最近焦りながら過去踏み込みが足りなかった文学、芸術、宗教などの領域の学習に系統的に取り組む遅ればせながら未知に踏み込んだ感動などを味わっている。ことごとこの様に 80 歳の大台は気付かぬことに気づき知らなければよかったことに煩い消沈する人生最大最後の節目のような気がする。そして敢えて言えば不遜にも老若を問わず他人の生き方、姿などの生き様なども見透えることができるような自信が身についたような錯覚を感じる。現代、80 歳迄は社会人として見てくれるようであるがそれ以降は引退者と扱われるようで世間はどうぞ花鳥風月を愛でて下さいと言ういたわりを口実に締め出されることが多いと感じている。人間誰もが過去を振り返るが自分の一生を一人の完結した人生と意識して振り返ることが出来るのは幸せかもしれないと思う。私は平素余り歳を意識することはないが、対外的に年齢などを書き込む機会などにぶつかると昔私自身が何気なしに「80 のジジイが…」などと言っていた年になったのだ。そして昔の諸先輩の顔を思い浮かべながら「歳月は平等に巡っているのだ」と感じると同時に後輩の顔が目に見え何となくほっとするのが偽らざる心境かもしれない。



以上八十路雑感を書き連ねたが見近な愛する後輩に贈る言葉としてはとに角精神文化を大切に、紐解き習得して感動する分野が山程あることを心して八十路に慌てぬよう今の日々を大事に生きてほしい。「老年老いやすく学成り難し、一寸の光陰軽んずるべからず」です。